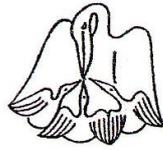




阿佐ヶ谷教会



信友会会報

4月例会報告（2018年4月22日開催）

聖書研究 ローマの信徒への手紙 12章
コリントの信徒への手紙一 12章

2018年度初めての『信友会会報』をお届け致します

本号では、4月例会で古屋治雄主任牧師に『教会生活の底力』と題してお話し頂きました講話の要旨を、玉澤武之兄と荻原雄二兄のご尽力でまとめて頂きました。

信友会もそれなりに高齢化が進んで来ておりますが、これまでに信友会の大先輩達が築いてこられた良い伝統を残しつつ、若い会員達から発揮いただける新しい価値観との有機的なバランスが、プログラム面でも、運営面でも、求められているのかもしれませんが。マンネリに陥る事なく、各自の信仰を静かに深めて行く為の一助とならんとする為に、阿佐ヶ谷教会唯一の男子部会としての信友会に、今その『底力』が問われている時だと思えます。

（日高好男）

「教会生活の底力」

古屋治雄 牧師

—ローマの信徒への手紙 12章と第一コリント 12章を中心に—

<はじめに>

新しい年度の最初の例会で、現在の教会生活を支える基盤を生み出すもの、教会生活の底力を考えたいと思います。その力は、まず神を崇めて奉仕に携わる力をどのように生み出していくかにほかなりません。それは人間的判断で、自らの奉仕の内容を評価するのではなく、そもそも私が阿佐ヶ谷教会に結ばれていることを見直し、その中からいろいろ力をいただいてゆくという方向で考えることが大切です。そこで、阿佐ヶ谷教会に結ばれている「私たち」とはどういう「私たち」なのかを考えたいと思います。

<教会に連なる「私たち」とはどういう者か>

「私たち」の中にまず「私」がいます。神の前に生きる個人としての「私」です。次に「私たち」と言うと、家族や交わりを持った人々と共にいる「私たち」がいます。そして三番目に、私たちは社会的な存在でありながら、小さな群である教会での交わりの中にある「私たち」がいます。教会に結ばれた「私たち」はかなり特殊であり、社会一般から見ると例外的ともいえる「私たち」です。教会に属しながら社会生活との中で生きることで葛藤する経験を持った人が多いと思います。私たちの教会生活を積極的に展開する力、エネルギーはどこから来るのでしょうか。オーバーワークで疲れ切り、教会生活が消極的になり、力を生み出すに至っていない

い現実を知らされることも多いと思います。

＜ロマ書での「私たち」＞

パウロがローマの教会に宛てた手紙の相手はどのような人であったでしょうか。

パウロは、ローマには行ったことがなく、知っている人はいてもローマの教会の設立に携わっていません。



ここでパウロが語りかける「あなたがた」は、「神に愛され、召された聖なる者となったローマの人たち一同」であり、希望をもって語りかけています。

1章18節で「不義によって真理の働きを妨げる人間」、2章1節で「あなたは他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている」と厳しい口調で呼びかけています。一人称のこの呼びかけは、未だ神を知らず勝手なことをしている人々全体つまりローマ教会の人々を越えて人間一般を指して語られています。

2章17節から、ユダヤ人に対するの叱責

を行っています。ユダヤ人として律法を熟知し他人を指導する立場にある一方で、自分が盗んだり、姦淫をしたり、神殿を荒らす行為をあげて、「あなたたちのせいで、神の名は異邦人の中で汚されている」と指摘し、あなたが受けた割礼は律法を守ればこそ意味があり、律法を破れば割礼を受けていないと同じであると論じます。ユダヤ的慣習すなわち律法を理解し、人々を導く立場にありながら墮落しているところを鋭く指摘しているのです。ここで神の民とされているユダヤ人一般の現実を指して語っているのです。

一方、パウロの展開は異邦人にも向けられています。11章11節で、異邦人の救いという小見出しで、罪に落ちたユダヤ人によって異邦人が救いに与ることが語られます。パウロは11章13節で自らを異邦人のための使徒であること、その務めを光栄であると言います。

11章17節から、野生のオリーブである「あなた」について語ります。この野生のオリーブは異邦人を指しますが、この野生のオリーブが接ぎ木されて根から養分をもらいます。折り取られた枝すなわちユダヤ人は不信の故に折られましたが、あなたがた「異邦人」は信仰によってキリストの招きを受けたと言います。神の裁きと深い慈しみを知らなさいと言っています。

＜キリストにおける新しい生活＞

12章1節から、「こういうわけで、兄弟たち、神の憐みによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして捧げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」。教会生活は、教会に導き入れられた者たちの特別な生き方、生活なのではなく、すべての人々がキリストの体である教会共同体へと結ばれることによって新しく生きる者とされています。

ロマ書はこの11章までユダヤ人や野生のオリーブの枝と言われる異邦人の救いについて神の救いの歴史や福音の普遍性について語ってきましたが、この12章からキリスト者の生活の在り方を語り始めます。2節「この世に倣ってはならない。むしろ心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神が喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようにしなさい」と勧めます。

4 節から、有名な一つの体が多くの部分からなっていること、それぞれの部分が違った役割を持ち、6 節、「わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っている」と教えます。この賜物は、すべての人に与えられており、それは個人の努力によって獲得する特技というようなものではありません。昨年は宗教改革 500 年の記念の年でした。ここでは信仰義認の教えが強調されました。1 章 17 節の「神の義は福音を通して与えられる」こと「正しい者は信仰によって生きる」と言い、3 章 21 節に「イエスキリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」（信仰義認）と語ります。しかしここでは、具体的な信仰的行動が示されていませんが、何も行動しなくても良いことにはならないのです。

12 章以降のキリスト者の新しい生活で、5 節から聖霊によって信じる者に賜物が与えられること。与えられる賜物は同じではないが同じ神から与えられていること。それぞれ与えられた賜物を用いて務めを果たすことによって全体に益となるためと言い、8 節以降には賜物を数えます。知恵の言葉、信仰、病気を癒す力、奇跡を行う力、預言する力等です。私たちが与えられた賜物を存分に活かし、教会の中でそれぞれの賜物を用いて主の栄光を現す働きを行うことが大切です。教会は賜物を活かして奉仕する使命を託されているのです。

＜コリント教会の現実＞

I コリントが示す教会生活の要点は、弱さを担うための霊的な賜物です。ロマ書では、信仰理解とそれに基づく生活を普遍的な視点で語っているのに対して、I コリントでは、パウロが教会設立に関わった関係から教会で起こる諸問題に具体的に答えています。

コリントは、アテネに次ぐ大きな町で、港町であることから多様な人々や文化が交叉する町、また遊興の町の只中にあり、また沢山の指導者が出入りし、分派活動が起こっている等問題だらけでした。パウロは事前に課題についての問い合わせを受け、I コリント書にはそれへの回答が多いのです。

具体的な問題については、5 章 1 節で、みだらな行いで父の妻をわがものにするなど、異教徒の行いにもないほどの淫らな行いと言っています。6 章 1 節からは、争いの仲裁を聖なる者ではなく正しくないものに依頼していること。7 章 1 節からは、結婚の問題が語られます。また、8 章 1 節からは、偶像に供えられた肉を食べることについて答えています。

パウロはこのように問題をかかえるコリントの教会に困惑していません。その只中で働いて下さる神の力を信じているからです。I コリントの冒頭の 1 章 4～9 節節から「わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けていることについて、いつも私の神に感謝しています。あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。・・・」。パウロは神の力を確信しています。



12 章では、3 節で聖霊によらなければ「イエスは主である」とは言わないのです。4 節から種々の賜物、務めや働きも神の霊から出ていると語ります。私たちは、この言葉から、教会がいろいろな聖霊を受けた共同体であることを認識し、なすべき課題を個々人が判断するのではなく、教会が担う賜物を理解し考える必要があります。

＜教会共同体の普遍性＞

パウロが示す教会の再生の要は、「体の中でほかよりも弱く見える部分」に着目することだと言います。12

節から、一つの体は多くの部分からなりそれぞれ働きを行うが、他の部分を排除できず、すべてで一つの体を構成していると言い、そして 22 節で「それどころか体の中でほかよりも弱く見える部分がかえって必要なのです。他より格好悪い部分を格好よくしようと、見苦しい部分を見栄えよくしようとします。」と言っています。

教会は小さな群れであるが、大事にしなければならない本質的課題は「弱い部分を担い合う」ことです。マイナスイメージであることが大切だと指摘されハッとさせられます。これらを信仰の目で洞察し、この視点から見直し、配慮し合い、共に苦しむ姿勢が大切です。

教会という一般社会とは違う特殊な集団の中という目ではなく、パウロが示すように、広義の私たち、つまり社会全体に呼びかけられる真理であると理解したいものです。

(文責：玉澤武之)